

# FLORA KANAGAWA

Dec. 24. 1994 No. 39

神奈川県植物誌調査会ニュース第39号

〒231 横浜市中区南仲通り神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会  
TEL045-201-1111内線7359 振替00230-5-10195



カワラノギク 相模川（座間市）にて（田中徳久氏撮影）

『保護上重要な植物種の現状』（レッドデータブック）で、危険種として扱われている。神奈川県でも以前は、酒匂川や相模川、中津川などに生育していたが、酒匂川では近年記録がなく、相模川水系でも河川改修や河川敷の過利用などによって減少しつつあるようだ。

城川四郎:	ミヤマツチトリモチの寄主の確認	416
城川四郎:	ヒメノヤガラ覚え書き	416
林 辰雄:	イヌセンブリの新産地	418
小崎昭則:	神奈川県産の植物補遺(4)	419
山田文雄:	エノキアオイを発見	423
奥津 均:	小山鐵夫教授の講演を聞いて	423
木場英久:	ギネアキビに御用心	425
事務局より		426

## ミヤマツチトリモチの寄主の確認 (城川四郎)

古い報告で恐縮であるが、昨年(1993年)8月13日、丹沢の学術調査で熊木沢から蛭ヶ岳に登る途中、佐々木あや子さんと増子忠治さんがミヤマツチトリモチを発見した。先を歩くわたしは気づかないまま通り過ぎてしまった。丹沢における採集記録は1例だけなので、証拠標本として、もっと发育のよい個体はないかと引き返した。残念ながらよい個体がなく標本は諦めたが、何に寄生しているのか気になった。もっとも近い木はブナである。しかし、その場所を丹念に調べていた増子さんと佐々木さんは、他から伸びてきている根に寄生していることを確かめ、その根がどの木の根であるか、熱心に調べ始めた。樹林の地下には縦横に根が錯綜しているし、岩石もある。根をたどっていくのは簡単な作業ではない。増子さんと佐々木さんは汗を流しながら掘り進める。サワシパの方に向いているかと思えば、モミの方に近くなる。「まさかモミではないだろう」と見物席のわたしは野次を入れる。その日の行程は蛭ヶ岳往復なので、わたしは「諦めて切り上げよう」などと弱気になる。しかし、執念深く(?)ねばった二人は、ついに、6mほど離れているコミネカエデがその根の主人であることを確かめた。寄主はコミネカエデであった。

平凡社の『日本の野生植物』によると、ミヤマツチトリモチの寄主は、カエデ類を主として、イヌシデ、クロソウル、まれにウワミズザクラ、ダケカンバの例があると記されている。今回の経験から、寄主の確認が容易でないことが分かり、多くの事例を記録した先人に改めて敬服の念を強くした。と同時に誤認の恐れもあるな、とも思った。なお、昨年は、ミヤマツチトリモチが4ヶ所で発見されたことが、本誌 No. 37 に勝山輝男氏によって報告されている。

## ヒメノヤガラ覚え書き (城川四郎)

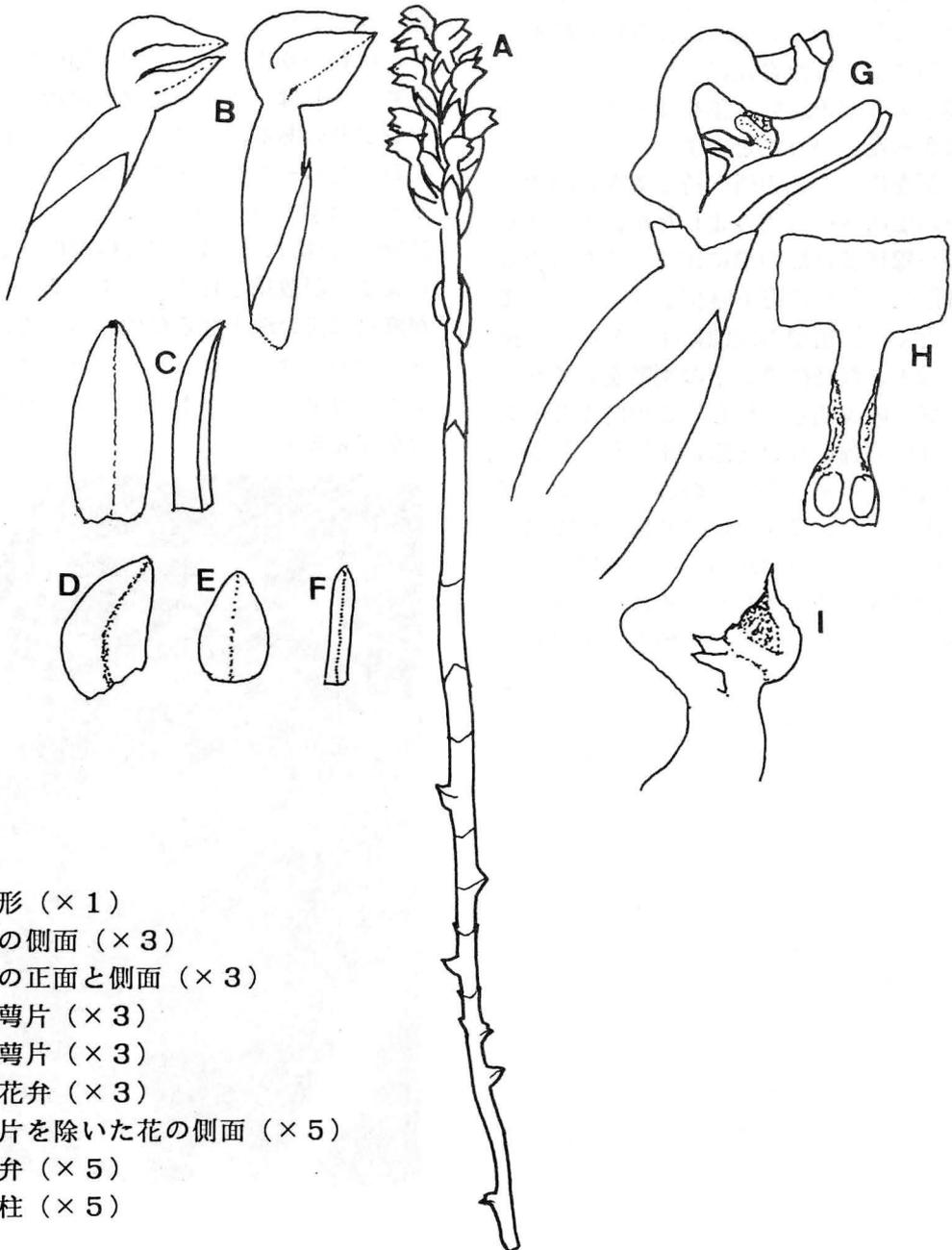
本年(1994年)7月10日、鎌倉源氏山でヒメノヤガラが採集された。今年は平塚方面でも群生しているのが見つかったという。ヒメノヤガラは1989年に大森雄治先生が横須賀市野比で採集されたのが本県では初めてのようである。もともと散発的にしか現われない、稀な植物で、しかも地味だから見つかる機会が少ないものと思われる。

この植物については、前川文夫先生が、久内清孝先生を通じて、牧野富太郎先生から資料の検討を託されたが、生品がなかなか手に入らず苦労されたらしい。本種についての研究が進められたのは、東北大学理学部付属植物園に、年々発生、開花する状況が観察されたことによるという。前川先生が生品に初めて接したのも、その植物園の産であり、それ以前の東亜植物図説161pに先生が描かれたのは、液漬標本によるものであったことが、先生の著書に記されている。平凡社の『日本の野生植物』には立派な写真があるが、撮影地が仙台というから上記の植物園なのであろうか。

さて、鎌倉で初めて見たとき、それがヒメノヤガラとはわからず、持ち帰って外形からそれと判断したが、花の構造が複雑で、特に蕊柱がなかなか分かりにくい。唇弁が蕊柱の上を覆っているのも他の花に見られぬ特徴である。前川先生が、この花の外形的特徴の一つとして記している「子房が直立し、花被はそれと直角につく」ことは、『日本の野生植物』の写真でも正にその通りであるが、わたしの図はかならずしもそうはなっていない。標本を持ち帰る間に花部を歪めてしまったのか、初めからそうであったのか判然としない。ただ、前川先生の『原色日本のラン』の図を見ると、最下の花は花被がやや上向きに描かれているので、常に直角ではないのかも知れ

ない。この花については、牧野、前川、津山の錚々たる先生方が、その解明に苦心され、菅谷氏によって木村有香先生の還暦記念号に発表されたという経緯があるだけでなく、一般に *Hetaeria sikokiana* (Makino et F. Maek.) Tuyama の学名が用いられることについて、前川先生は *Hetaeria* 属とは区

別されるとして発表された *Chamaegastrodia* 属を主張しておられる。そんなに難しい花なら、わたしもしっかり見ておこうと図を描いてみたが、蕊柱基部の突起がかなり鋭く尖っていることや、先端の角状突起の様子が記録とは多少違うように思う。残念なことに、資料の全部の花の蕊柱部にカビが生えていた。



- A 全形 (× 1)
- B 花の側面 (× 3)
- C 包の正面と側面 (× 3)
- D 側萼片 (× 3)
- E 背萼片 (× 3)
- F 側花弁 (× 3)
- G 萼片を除いた花の側面 (× 5)
- H 唇弁 (× 5)
- I 蕊柱 (× 5)

## イヌセンブリの新産地

(林 辰雄)

イヌセンブリ *Swertia diluta* Benth. et Hook.f. var *tosaensis* (Makino) H.Hara の新産地が見つかったのでお知らせします。その生育地は、昨年(1993年)10月15日に、横浜自然観察の森でボランティア活動をしている篠原由紀子さんが、鳥のセンサスに歩いていて見つけたもので、場所は横浜自然観察の森の一角です。篠原さんは一見してセンブリとは違うようだと思い、葉を噛んでみたが苦みはなかったということです。

花1個を採って私の所へ持ってきたので、私もその場所へ行ってみました。センブリの線形～線状披針形の葉に比べ、こちらの葉は披針形で、萼片の形も基部が細まっています。とくに、蜜腺の周囲に生える多くの長い白毛は大きな特徴で、どの図鑑を見てもイヌセンブリの説明と一致し、この時点でイヌセンブリに間違いはないと思いました。しかし、一番の決め手である白い毛の表面が、センブリの平滑に対し、イヌセンブリは波状突起があるというが、残念ながらルーペではどうしても確認できませんでした。それに『神奈川県植物誌1988』を見ても自生地を示す黒丸はただ1個。それだけに、こんな所にあるのだろうかという疑問もあり、花1個という不完全な証拠ではと思い、もう1年様子を見ることにしました。

1994年10月13日に見に行くと、昨年あった場所から2mほど離れた所に、昨年はたった1株だったのに、今年は2株がちょうど花の盛りでした。高さ26cmで、いちばん大きな葉の幅は広いところで5mm、花は12個ほどが開いていました。蜜腺の周りから生えた白毛も、ルーペがなくてもよく見えるほどたくさんありました。20cmほど離れた所にあるもう1株は、花はつけているものの、はるかに貧弱な株でした。なにしろ貴重な1株なので、茎の

途中から枝分かれした一部を切って、確認のため県立博物館に送ったところ、高橋秀男先生から「イヌセンブリです」という御返事をいただきました。『神奈川県植物誌1988』発行以後、イヌセンブリの採集記録がなければ、箱根の仙石原について横浜自然観察の森が貴重な第2の産地になったわけです。

付近は観察の森を造るときに、広場状に造成・整地されたといわれていますが、詳しいことはわかりません。その広場の端が谷側に落ちる辺りは、アズマネザサが密生し、イヌセンブリのある辺りは一面チガヤが優占し、これに混じってセイタカアワダチソウ、ノジトラノオの幼苗(ノジトラノオについては100mほど離れた所に数100株が群生しています)が散見されます。すぐそばには、雨が降れば浅い池となる窪地もあって、秋にはトダシバやウシノシッペイ、ユガマ、メリケンカルカヤ、チャガヤツリ、タマガヤツリなどが生えます。



イヌセンブリ

昨年も、1株しか無いはずはないと、周囲を随分探したのですが、他には見当たらず、今年も2株しか探せませんでした。それにしてもこのイヌセンブリ、細々と、しかし絶えることなく連綿と世代を受け継いでここにあったのでしょうか、それとも最近何かの力で種子が運ばれたものなのでしょうか。

その後の観察では大きい株は充実した果実

を着けています。この株から落ちた種子が発芽しやすいよう、ポランティアの方々が株の周りの枯れ草を刈って土を露出させるなどしています。大事に保護しながら、これからの推移を見守っていきたいと、関係者は話合っています。最後になりましたが、同定していただきました高橋先生に厚く御礼申し上げます。

## 神奈川県産の植物補遺 (4)

(小崎昭則)

### ◇オウギシマヒメハリイの学名

本誌p.246-247 (27号), p.284 (28号; 綴りを訂正)において、上記の新産外来種を報告したが、用いた学名 *Eleocharis calva* Torr.は、Svenson (1957)に、“provisional species”と記されていた。命名規約上の何らかの問題があったものとみられる。詳しい経緯は明らかでないが、ここではその見解に従い、*Eleocharis erythropoda* Steud.を上記の和名(新称)の植物に当てておく。分布は概ね先に示したとおりで、北米の中部以東のハドソン湾にかけての地域と、大西洋を挟んだヨーロッパ西部の沿岸地域で、主に石灰質の地域に生育する。

[文献] Svenson, H.K., 1957: SCIRPEAE. NORTH AMERICAN FLORA, 18(9): 505-556. (p.525)

### ◇セイヨウウキガヤの学名と追加産地

本誌p.360-361 (33号)に新称した上記の和名の植物に対して、筆者は *Glyceria declinata* Brebisson を当てたが、その記相中に示した“内穎は護穎とほぼ同長”という点に一部の疑問を感じていた。そのため、さらに文献の調べを進めたところ、Cronquist et al (1977)に説明のある

*Glyceria occidentalis* (Piper) J.C.Nels.に合うことが分った。両者は非常によく似た分類群であるが、Cronquist らによれば、*G. declinata* はヨーロッパ産の2倍体種 ( $2n=20$ )、*G. occidentalis* は北米産の2, 4倍体種と分布域も異なる。ただ、*G. occidentalis*、とくにその4倍体では、外部形態上の変異が大きく、アメリカでも *G. declinata* との同定上の混乱を来しているようである。*G. occidentalis* の分布域は北米西岸側の諸州と東のワシントン州で、生育地は浅水中、池の泥岸、沼地の湿ったところ、小さな流れの中などとされる。

和名については、本来当てるべき示種名 *occidentalis* (“<北米の>西部の”の意で用いたと考えられるが、“西洋の”という意味もある)を予想していたわけではないが、本植物に当てたものとしてそのままにする。

ところで、横浜市港北区(現都筑区 Tsuzuki-ku)の発見地は環境が変わり跡形もないが、今年4月、茅ヶ崎市の谷戸の耕作前の水田(数枚)においても多数の本種を確認することができた。出穂は、北米と比べて温暖なためか、かなり早く、田植えの耕耘が行われる5月に熟期を迎えるものも見られた(北米では6月下旬~8月)。この方面では水稻に直接の被害が及ぶことは考えにくい、冬から春の耕作前の“水田雑草”として徐々に定着していく可能性はある。周囲の状況か

ら、侵入経路は緑化用または牧草として導入した Ryegrass類 (*Lolium* のネズミホソムギなど) “種子” への混入が考えられる。

[文献] Cronquist.A., Holgren.A.H., Holgren.N.H., Reveal.J.L. & Holgren.P. K., 1977: INTERMOUNTAIN FLORA Vascular Plants of the Intermountain West U.S. A., Monocotyledons. Vol.6. THE NEW YORK BOTANICAL GARDEN. 584pp. (p.338-344)

#### ◇イネ科 *Dichanthelium* の新外来品 (予報)

1992年6月、箱根町の芦ノ湖畔を訪れた際、路傍2ヶ所に全草多毛の見慣れぬイネ科植物が生育していた。出穂には少し早い状態であったので、一部を持ち帰り植えておいたところ、上記の属に含まれる植物であることがわかった。この属は、キビ属 (*Panicum*) に含める考え方もあるが、解剖学的、生理学的所見をもとに、Gould が1974年に分離したものである。一般書では、長田 (1993) の『増補日本イネ科植物図譜』のニコゲヌカキビのところにその経緯が触られている。前出の Cronquist et al (1977) によれば、本属の分布はカナダ南部から南米にかけての地域にほぼ限定され、50~100種ほどがあり、アメリカ南東部に最も多く、ハワイ諸島にも数種あるという。また属名の意味は、二形性を示す草姿に関係があるらしい。

さて、今回の種であるが、Chase により改定された Hitchcock の普及書『Manual of the GRASSES of the UNITED STATES』に出ている植物の中では *Panicum thurouii* Scribn. 辺りが怪しいが、この仲間に類似種が多いこと、得られた標本や調べた文献が足りないことなどから、詳細は次の機会に回したい。もし、ここに示す植物に似たものを見かけたら、ご一報いただければ幸いです。

[外観] …冬季、ロゼット状になる多年草。茎は径2~5mm、太さの割にしっかりしていて基部から1ないし少数本が立ち上がり、8~12節ほどあって、高さ50~70 (~100) cm。押し葉では、やや灰色みを帯びた淡緑色を呈し、下部では紫色を帯びることが多く、少し膨れた節の直下には1.5~2mmほどの無毛帯があり、そこを除くと全体に白い軟毛を密生する。茎の毛は、すぐ下の節から、節間よりも短い開いた葉鞘の口部辺りまでがとくに密で、斜上毛が優勢、そしてここから上部の無毛帯までが僅かに下向きにほぼ開出するものとなっている。葉鞘にもやや下向きの軟毛を密生し、節ではとくに目立つ。葉は平らで、莖葉の葉身はふつう広線形、ときに狭卵形になり、基部は多少耳状、中部では縁がしばしば小さく縮れ、漸鋭先~鋭先頭、長さ3.5~13cm、幅0.5~1.2cm、中肋に平行する8~14本の脈がやや目立つ。葉身の両面にもほぼ開出する毛があり、下面で密度が高い。葉舌は長毛が並び、やや凹形の輪郭をなし、長さ0.5~1.4mm。花期は7~9月頃。この時季には茎の基部2節以下の葉は枯れてほぼ失われている。花は茎頂、または茎の上半部で1本ずつ分かれて斜上する枝の先に、円錐花序をつくる。花序は枝が広く斜開するが、その下部は葉鞘から完全には抜け出さない傾向があり、長さ3~10cmほどの比較的小型の卵状楕円形になる。小穂は長さ2.1mm前後、幅1.1mm。花の細部については次回とするが、熟した果実は得られていない。

#### ◇1993年5月5日の総会時 (横須賀市自然博物館) に標本提示した種から

##### ①ミチタネツケバナ

工藤ほか (1992) が新帰化植物 *Cardamine hirsuta* L. (新称) として報告した。そこで示された標本産地は東北、北陸、近畿などであるが、関東にも見られる。

県下では横浜市旧緑区（青葉・緑）、旭区の数ヶ所で、東京都では八王子市堀之内の大学構内に広く帰化するのを確認した。市街地から郊外の住宅地にかけての道端や歩道脇の小さな攪乱された空間、造成地、踏まれる頻度の少ない芝生、時には苗圃や畑などにも生育し、水田のようなタネツケバナ *C. flexuosa* With. の多い環境では見かけない。タネツケバナとの形態的、生態的違いについては工藤らに詳述されており、とくに付け足すことはないが、県下での広がりを見越されていることも予想されるので、花期（3月上旬～4月。タネツケバナの10～12月および3月下旬～5月と比較すると短い）を前に、この時季の外観についても少し触れておきたい。観察は12月上旬、八王子市堀之内にて行った。ミチタネツケバナ … Aのような径2～15cmの明瞭なロゼットを形成する冬型一年草で、この時季に抽臺するものは見られない。葉は頭大羽裂し、各羽片の切れ込む傾向は弱く、

頂羽片は少し横広がりや丸みを帯びた形になることが多い。

タネツケバナ … おもに冬型の一年草で、とくに明瞭なロゼットはつくらない。茎は現在1～25cmほどに伸長し、次々と開花、結実している（B）。花卉は春季のものと比較するとやや小型。茎の下部の葉の切れ込む傾向は前種と比べて強く、中～深裂するものが目立つ。裂片は半円形、倒卵形、卵形などで輪郭には丸みを感じられる（この材料にはミスタネツケバナと呼ばれる形も混じる）。先も鈍形、円形、切形、僅かに凹形など変化に富み、しばしば明らかな微凸頭に終わる。

タチタネツケバナ *C. fallax* Nakai … 冬型の一年草で、明瞭なロゼットを形成し、この時季に抽臺しないことはミチタネツケバナに似ているが、羽片はふつう5対以上（ミチタネツケバナではふつう2～4対）あり、浅～中裂するものが目立つ（C）。裂片は卵状または広卵状三角形に近くなり、裂片の先は鈍



タネツケバナ属3種の標本コピー（スケールは1cm）

A：ミチタネツケバナ；B：タネツケバナ；C：タチタネツケバナ

形～円形で明らかな微凸端に終わるものが多い（ミチタネツケバナにもこの凸部はあるが、一見目立たない）。また、葉の下半部に開出毛が多い傾向にある。

なお、コタネツケバナの名で川崎市川崎区東扇島産の標本を提出した記憶がある。ミチタネツケバナの誤認の可能性もあり、県内産の再検討が望まれる。

[文献] 工藤洋・石栗義雄・河野昭一、1992：タネツケバナ属の新帰化植物 *Cardamine hirsuta* L. ミチタネツケバナ. 植物地理・分類研究, 40(2): 85-89.

## ②ヒメアメリカアゼナ

山崎 (1988) が日本への帰化を報告し、上記の和名を与えた。また、アメリカアゼナとの形態的な違いにも言及し、*Lindernia anagallidea* (Michx.) の見解を示した。筆者もこれに同感である。アメリカアゼナとは、山崎が紹介した、葉が小さめで、果柄がそのすぐ下の葉（苞）の2～3倍長になるという性質のほか、花冠が小さいことでもはっきりと区別できる。

県下では津久井町の道志川右岸に点々と生育する。相模湖の上流、山梨県側でも確認した。ただし、神奈川県内の他地域では見えない。千葉県ではため池の水辺に比較的ふつうで、利根川河川敷の湿った砂泥地や一部の新しい休耕田でも見られた。また埼玉県、宮城県でも確認した。

[文献] 山崎敬、1988：ヒメアメリカアゼナ 日本に帰化. 植物研究雑誌, 63(12): 410-411.

## ③マルホホタルイ

横浜市の旧港北区牛久保町において1987年に筆者が採集した“ホタルイ”を改めた。新品種として発表された *Scirpus juncooides* Roxb. var. *Hotarui* (Ohwi) Ohwi form. *globosospiculosus* M.Kikuch の学名がある。“ホタルイ”は分類上極めて難しいグループであるが、一般に呼ばれているホタルイとは

異なる外形を有することから、一応この名を挙げておく。文献コピーのご提示をいただいた野口達也氏にお礼を申し上げる。

[文献] 菊池政雄、1961：（北日本植物考察 2），岩手大学学芸学部研究年報 第18巻：36.

## ④ホタルイ×カンガレイ

箱根町仙石原の両親の混生地には3株が自生（1992年9月）。許可を得て一部を採集した。本雑種は両親の分布域や自生地の重なりのおおきさも関係し、本州では広く見出される。

◇ 1994年4月10日の総会時（平塚市博物館）に標本提示した種

## ①イヌイワイタチシダ

*Dryopteris saxifragi-varia* Nakai

県下では横浜市緑区三保町2ヶ所において1993年11月、1994年1月に1株ずつ見出した。多摩丘陵ではこれより早く、1992年12月に酒井藤夫氏が東京都八王子市で発見している。

## ②ジタロウイノデ

*Polystichum* × *jitaroi* Kurata

1993年12月、横浜市緑区長津田町で1株発見した。アスカイノデとサイゴクイノデの雑種で、国内でも稀である。

両種についての詳細は筆者らが発行している多摩丘陵植物調査会の会報「多摩丘陵の植物、第6号」および『多摩丘陵のシダ植物』（ともに1994年3月）に報告した。

[訂正]

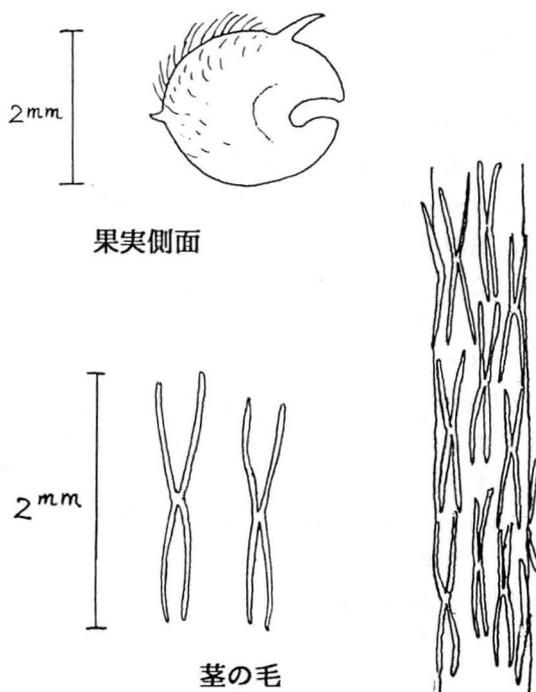
本誌 p.359 (33号) のアイノコフユイチゴの項に載せた学名には不備があったので、次のように改める。

→ *Rubus* × *pseudohakonensis* Sugimoto

## エノキアオイを発見

(山田文雄)

1994年11月10日、中区山下埠頭内の荷捌地を歩いていたところ、高さ20cmぐらいの見慣れないアオイ科の一種を発見した。キングジカかもしれないと思い、根元より採集して勝山輝男先生に見ていただいたところ、熱帯アメリカ原産のエノキアオイ *Malvastrum coromandelianum* Garke であることが分かった。茎には先が4本に分かれた平伏した毛がまばらに生えていること、葉脈の様子がエノキによく似ていること、果実に刺があることなどがエノキアオイの特徴をよく現していた。生えていた場所は日当たりのよいアスファルトの裂け目で、まわりにはほとんど草が生えていなかった。本邦では東京都(杉本検索誌)と岡山県・香川県(長田武正『原色日本帰化植物図鑑』保育社 193p.)から報告されている。神奈川県では新産である。



## 小山鐵夫教授の講演を聞いて

(奥津 均)

11月12日に、日大農獣医学部の資料館において、応用生物科学科の小山鐵夫教授による『黒船が採集した日本の植物とその隔離分布について』の講演会がありました。

小山教授は、皆様も御存知のようにニューヨーク植物園のアジア部長として長い間勤められていましたが、今回、その縁でニューヨーク植物園に保管されていた、140年前の日本で採集された植物標本約100点を借用し、日本に里帰りさせ、一般公開することになりました。これを記念しての表題の講演会です。

この講演は、90分にわたる大変貴重な内容でしたので、調査会の皆様方に要旨をお伝えしますので、御参考にしてください。

なお、この講演は、ペリーの来日から始ま

りますので、『神奈川県植物誌1988』の小原敬先生による「神奈川県植物研究史」の中のペリー来日の部分を事前にお読みくださることをお勧めします。

その概略は…ペリー提督が日本に来た理由は捕鯨船の薪・水補給基地の確保であり、もうひとつは日米和親条約を結ぶことでありました。さらに、各種科学の資料収集として日本における動植物調査が含まれていました。そのため、ペリー遠征隊に乗って来たのがウィリアムズ、モローなどの人達であり、彼らが植物を採集しました。この標本を、ハーバード大学のエイサ・グレイ教授が研究し、日米のフロラの類似性に気がつき、次の遠征隊には、ライト博士と彼の助手のスマール氏をのせ、より多くの植物標本を集めるよう依頼したのです。…詳しくは植物誌の本文をみ

てください。

[1] ペリーが来日した理由は、前述の通りで、ウィリアムズ、モローによって、下田、横浜、函館で採集された植物は、当時のハーバード大学の植物学の教授エイサ・グレイ博士によって研究、同定され、その中から多くの新種が発見・記載されました。今回の特別展示では、次の8点がタイプ標本として出展されました。

シロバナノハンショウヅル

*Clematis williamsii* A. Gray (下田)

ヒメカンスゲ *Carex conica* Boott (横浜)

キンギンボク

*Lonicera morrowii* A. Gray (北海道)

ニョイスミレ

*Viola verecunda* A. Gray (北海道)

エゾノタチツボスミレ

*Viola acuminata* Ledebour (北海道)

チゴユリ

*Disporum smilacinum* A. Gray (北海道)

カワラスゲ *Carex incisa* Boott (北海道)

ツボスミレ

*Viola grypoceras* A. Gray (北海道)

①この学名をみてお分かりのように、ウィリアムズとモローは、それぞれの種小名に名を残すことになりました。

②カヤツリグサ科のスゲ属 (*Carex*) は、日本に400種もあり、分類が難しかったようで、英国のキュー植物園に依頼し、スゲ属の専門家であるブート氏が同定しました。

(筆者注) ニョイスミレとツボスミレについて、和名と学名が間違っているとお思いでしょうが、これはこれでよいと思います。私は旧版の牧野図鑑をもっていますが、この本の第925図と第932図ではこうなっています。

[2] 第1回目のペリー隊の採集品を調査したグレイ教授は、東アジアの植物と北米東岸のアパラチア山系の植物とが、余りにも類似

しているので、隔離分布の詳しい研究をしようと考えました。第2回目の遠征隊が出る際には、ハーバード大学の要請を受けて国(米国海軍)が協力をする事になり、植物学者のライト博士とスモール氏を乗せて、日本の植物の大がかりな採集をしました。この時の採集品は200種を上まわるほどの成果でした。その中から新種として記載された植物には、ライト博士とスモール氏を記念した次の学名があります。

オオバスノキ *Vaccinium smallii* A. Gray

クマイチゴ *Rubus wrightii* A. Gray

キジカクシ *Asparagus wrightii* A. Gray

さて、隔離分布については、講演でザゼンソウやエンレイソウなど多くの実例をあげられて、ひとつひとつスライドを使って説明されました。今回は私の印象に残った2つについて記します。

ひとつはチョウセンニンジン属 (*Panax*) の植物です。チョウセンニンジン(人參)は中国から沿海州を通過して朝鮮半島に分布し、日本にはその近縁種のトチバニンジンがあります。それに対して北米のアパラチア山系には、アメリカニンジン(広東人參)があり、太平洋をはさんで東と西に隔離分布しています。*Panax* の仲間(トチバニンジン)は、第三紀にベーリング海の北辺で分化した植物と考えられ、当時は温暖で、ロシア東端とアラスカが地続きであったと考えられています。その後氷河期に入り、この地方が寒くなるにつれ、植物は南に移動するわけですが、そのとき太平洋を真中として、東アジアと北米とに隔離分布したということです。その後、北米はもっと寒い時期があり、北米東部にだけ孤立した形で残り、北米の西海岸、すなわちシアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルスにアメリカニンジンはありません。薬剤師である私にはとても興味のある話でした。

もうひとつは、氷河期になって気温が下がり、植物が南へ移動するとき、消えてしまっ

た植物や残った植物があったことです。東アジアで絶滅し北米に残った植物としてはユリノキがあり、逆に東アジアに残って北米で絶滅した植物としてメタセコイアをあげられていました。

[3] 昭和天皇は、下田須崎の御用邸で地域の植物を研究された際、黒船の採集した植物に下田のものが多くあることに気がつき、グレイ教授が記載したタイプ標本を中心に研究されました。

昭和50年(1975年)に訪米したときに、ニューヨーク植物園へ行幸され、そして帰国後、前園長スティーア博士、園長アーウィン博士、そして小山博士の御三方より『日本で採集された植物のさく葉標本の目録』が寄贈されました。昭和天皇はそれについて「寄贈者の好意に感謝している」と、著書の『伊豆須崎の

植物』の中で述べられています。

小山博士の講演の要旨はこのようなものです。浅学の私には皆様方に対して充分にお伝えできなかったと思います。私個人の感想としては、私達がどこでも見ることのできるタチツボスミレが、今から140年も前に、ペリー遠征隊によって日本の函館で採集され、それをエイサ・グレイ博士が記載し、タイプ標本となったいきさつを知り驚きました。そしてその植物のタイプ標本の実物を見て感激しました。私はとてもニューヨーク植物園までは行けませんが、行って見たのが昭和天皇だったとは二重の驚きでした。

小山博士の話はわかり易く、とてもよい講演であって感謝しております。また、この文をまとめるにあたり、小原敬先生より多くの文献を見せて頂き、いつもながらの御親切に對し謝意を表します。

## ギネアキビに御用心

(木場英久)

山田文雄さんが、1994年8月4日に山下埠頭の路傍でギネアキビ(ギネアキビ) *Panicum maximum* Jacq.を採集されました。

山田さんは、このところ毎週のように、新横浜にある日通定温倉庫の神奈川県博の仮作業室に来て植物の勉強をしています。自分で採集した植物標本を持ってきて、博物館の標本と比べたり、図鑑を引いて名前を調べ、それでも分からないものは勝山さんや高橋さんに教わっています。

ある日、いつものように持ってこられた標本の中に、大型で円錐花序のイネ科植物がありました。実はこれがギネアキビだったのですが、私は、花序の枝の下側に小穂が等間隔にまばらに並んでいる様子を見て、季節がらトダシバに違いないと思ったので、「それは、

トダシバでしょう。この種は変異が大きいので、とても同じ種とは思えないような変わり者がときどきあるんですよ」と、知ったかぶりをしてしまいました。

納得のいかなかった山田さんは次の週、その標本とともに近所で採集したトダシバを持って来られました。よく見てみると、確かに違う。ギネアキビは小穂の頭がやや丸く、第一苞穎も小穂の半分より短い。山田さんの話によると「初めて見たときには、草丈が1mぐらいでススキのような大株だったので、へんなセイパンモロコシのような植物が生えているなあ」と思ったそうです。

よく似た植物でシンギネアキビ *Panicum plenum* Hitchc. et Chaseというのが『植物誌1988』の補遺に出てきます。ここに引用されている標本(伊勢原市東富岡, 1987. 10.9 内藤美知子氏採集)は、森茂弥さんによって同定されたものですが、現在、この

標本がどこに収蔵されているのか行方不明です。県立博物館にシンギネアキビとして収蔵されていた標本（伊勢原市東富岡，1988.9.5 内藤美知子氏採集，勝山輝男氏同定）は，調べてみると花序の枝の基部や葉に毛があり，ギネアキビでありました。これと同時に採集

された標本が『湘南植物誌Ⅳ』に引用されていて，「葉鞘に毛がある」のでギネアキビとされています。つまり，山田さんの採集品は6年ぶり，2度目のギネアキビの記録ということです。さて，行方不明のシンギネアキビは，どこへいったのでしょうか。

### 事務局より

#### ◇ 靱山泰一先生論文集発刊 祝賀会 神奈川県植物誌1988完売

先日お知らせした“靱山泰一先生論文集—卒寿記念—発刊・神奈川県植物誌1988完売祝賀会”は，去る12月3日に，靱山泰一先生はもちろんのこと，会員を中心に，東京大学の関係者も含め，総勢45名が参加し，盛大に催されました。なお，当日参加された方には，『靱山泰一先生論文集』をお渡ししましたが，参加できなかった方には，本誌とともにお送り致しました。ご希望の方には，領付致しますので，事務局までお申し出下さい。

会員	直接受取の方	2,000円
	郵送の方	2,500円
会員外	直接受取の方	2,500円
	郵送の方	3,000円

#### ◇ 文献紹介

多摩丘陵植物調査会『多摩丘陵のシダ植物—横浜市緑区・旭区を中心に—』（1994年3月）行政界を越えた“多摩丘陵”地域を意識したシダ植物の記録である。出口長男氏の—連の著作『多摩丘陵帷子川流域の植物』（1953）『横浜植物誌』（1968）等，本会の『神奈川県植物誌1988』（1988），岡武利氏の「横浜北西部のシダ植物」（1990）を土台に，後の知見も加え，標本を中心にした分布記録，生育環境，メモ等が詳細に記述されている。多摩丘陵地域のシダ植物を知るのに，貴重な著

作である。必要な方は，多摩丘陵植物調査会事務局小崎昭則氏まで。

#### ◇ 前号の訂正

前号の表紙に2ヶ所の訂正があります。ベニバナヤマシャクヤクの撮影者が，“長谷川勝博氏”となっていますが，“長谷勝博氏”の誤りでした。写真の掲載を快諾して下さった長谷氏に，たいへん失礼なことをしてしまいました。また，東良雄氏の報文のタイトルで“追加される”が重複してしまいました。どちらも，木場の失敗です。陳謝して訂正いたします。

#### ◇ 事務局移転のお知らせ

1995年1月より，県立博物館の自然部門が，自然系博物館として小田原市入生田499番地に移転するのにともない，事務局も移ります。なお，博物館のオープンは3月20日の予定ですので，来年度の総会は，見学会を兼ね，小田原で開催できればと思います。

#### ◇ 編集後記

次号の FLORA KANAGAWA は5月ぐらいに発行したいと思いますので，4月中旬までに原稿をお寄せ下さい。また，今後 FLORA KANAGAWA のサーキュレーションを高めるために，関係各機関や同好会等にも配布しようと考えています。心当たりがありましたら，事務局まで情報を頂ければ幸いです。